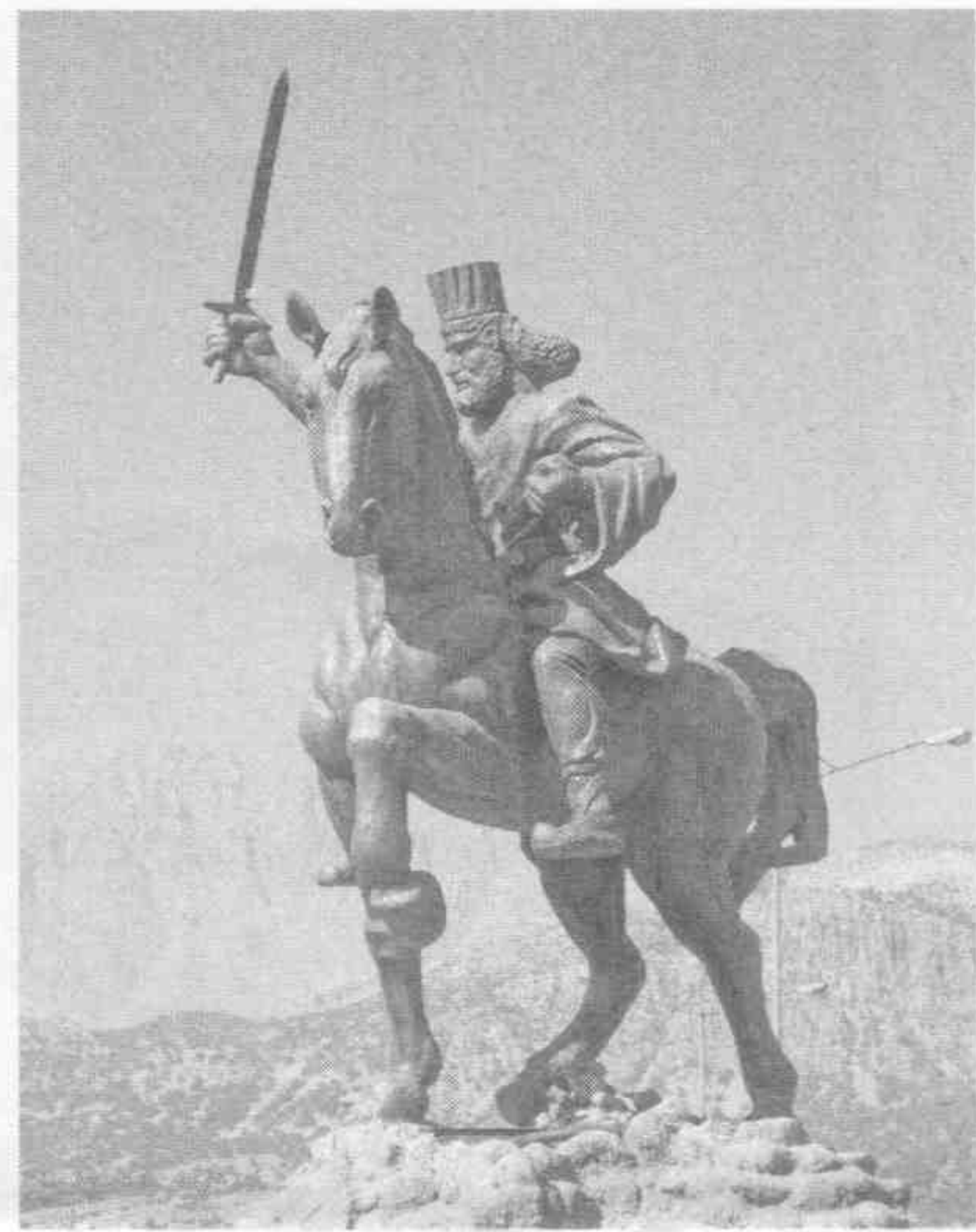




3) メーリアン溪谷＝ペルシア門 舗装道路のすぐ下を溪流が流れる。左手前がペルシア軍の陣地、後方の尾根にマケドニア軍が現れ、背後から攻撃した。

スにとってペルシア門の突破は、ペルセポリスに至る途中で起きた1つのエピソードにすぎない。これに対して総督アリオバルザネスは、首都を守るために全力を傾けた。ペルシア門での戦闘は、彼が熟慮の末に選んだ戦略拠点において、侵略者を阻止するために行なわれたのである。それゆえこれは「アケメネス朝最後の戦い」として意味づけられねばならない。ちなみにヤ



4) アリオバルザネスの騎馬像 ヤスジの入口に立つ。

スジの市街地の入口には、アリオバルザネスの騎馬像が立っている（写真4）。地元では英雄として称えられ、誰もが彼の名を知っている。

遠征経路の研究とは、単に軍隊の道筋を復元するだけではない。それは東方遠征を新たな角度から再評価することなのである。なお科研費によるイラン調査は、今年の夏にも継続する予定である。

#### <研究プロジェクト紹介>

### ヤコビを継ぐもの～Brill's New Jacoby プロジェクトの紹介（後編）

佐藤 昇（東京大学）

核となる編者陣がいるとは言え、きわめて多くの研究者が数名の歴史家を担当して調査、執筆を行うのである。古代ギリシアにおける歴史叙述の全体像を独力で描き出そうとした *FGrH* とは自ずと性格も異なってくる。すでに学問的な批判を浴びている、ヤコビの発展段階論的全体像にはとらわれず、個々の歴史家、個々の断片のひとつひとつについて、より丁寧に、より詳しく、最新の知見を基に解説を加えることで、コメントリ、レファレンスとしての価値を高めることに新企画の眼目があると言えるだろう。さらに古典語の全てに英訳を添えていることから明らかなように、専門研究者に留まらず、学生など、幅広い層が利用することを想定

している。

体裁の上で大きく変更されたのは、オンライン公開という点である（他の媒体での公開は、現在のところ公式に発表されていない）。紙媒体ならば、おそらく重厚な冊子で何十冊にも及び、場所の確保や閲覧・検索の不便といった問題も発生していただろう。今回はオンライン公開により、閲覧に必要なのはパソコン一つ。また番号、個人名はもちろん、トピックやキーワードから、目的の歴史家、関連の断片を容易に検索できる。また *FGrH* も同時収録しているため、双方の比較も簡便である。さらに一部の単語、固有名詞にはハイパーリンクが張られており、そこから他の歴史家断片へのジャンプも



ワンクリックで済む。こうした利点を早くから想定して電子版での公開が決められたのだろう。

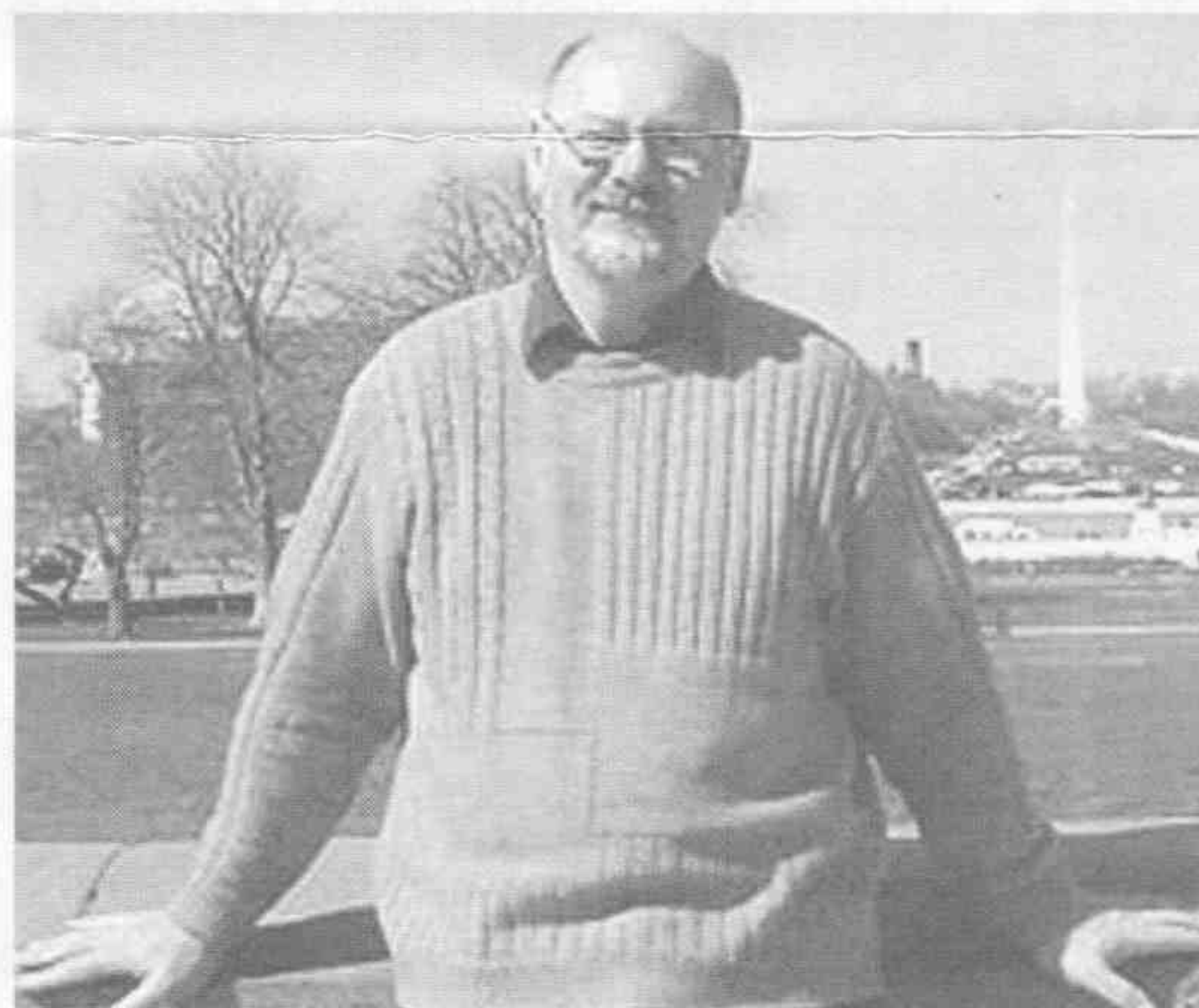
もう一つ、個々の断片に対して、扱われる主題、事件の年代、史料の年代などのタグをつけることになったのも新機軸である。たしかに検索のためには非常に便利ではある。反面、史料、扱われている事件ともに、容易に年代を特定できないことが多く、誤解を招く虞がある。注意深く利用する必要があるだろう。

公開はすでに2007年から部分的に開始されており、年に2度、毎回60名程度の断片史家が追加されている。現段階ですでに相当数の歴史家断片が公開されているが、最終的には2013年に全ての記事が公開される予定である。第3集までの歴史家断片の全てが、新しい校訂と最新の研究を盛り込んだ形で閲覧できるのもまもなくのことである。

さらに休眠していた *Continued*、第4集以降の歴史家断片もブリル社の同じサイトに組み込まれることになった（全体として *Jacoby Online* というタイトルが付されている）。既発表記事に加え、新たな断片を逐次公開することになっており、既に第5集の公開も始まっている。編集座長は第4集を S. Schorn (Leuven) が引き継ぎ、第5集は H.-J. Gehrke (DAI Berlin) が務める。BNJ、*Continued*、そして *FGrH* の全てが同一サイトで閲覧でき、また一括検索も可能となって、その点に関しては便利なことこの上ない。他方、BNJとは別個のプロジェクトとしてスタートした *Continued* は、編集方針も異なる。一見して明白なのは、第5集では担当者がドイツ語、イタリア語など、それぞれの母国語を用いていることである（第4集は確認した限り、冊子体を踏襲し、現在のところ英語が用いられている）。上述のようなタグも付されておらず、横断検索の際は少しばかり注意が必要だ。また註や参考文献の書き方を見ると、BNJと比べて、より専門性の高い読者層を想定しているように思われる。

私自身は諸般の事情で、2008年の冬にプロジェクトBNJに参加することになった。英国での二度目の在外研究を終えて帰国したときのこと、ワーシントン来日時のことであった。彼

は、米国に戻るとまもなくメールに添付する形で契約書と執筆方針、そして担当歴史家の雛形文書を送ってよこした。これを基にテキスト本文を書き改め、訳註を施していくのである。担当することになった歴史家 (491-492 Maiandrios or Leandr(i)os, 775 Antigonos) は日本では無名といってよく、テキスト本文を決定するだけでも、国内での作業では覚束なかった。夏期に渡英し、数週間オックスフォード及びロンドンの図書館に通い詰めて作業を行い、さらに帰国後、知人に依頼しては英独仏伊など各国の文献をいくつも入手しなければならないような有様だった。とりわけ初稿提出期限も半年前に迫り、原稿の概要も固まった頃、イタリアでの断片集出版情報を目にし、さらに自分が担当する歴史家を扱った巻がちょうど出版されたばかりと知ったときには、いささか目眩を覚えた (E. Lanzillotta dir., *I Frammenti degli Storici Greci* (Tivoli (Roma) 2002 -)。これまでに *Libyaka* (2002), *Cratero il Macedone* (2002), *Filocoro di Atene 1* (2007), *Istro il Callimacheo 1* (2009), *Milesiaka 1: Meandrio* (2009) が出版され、全体で50巻ほどが計画されている)。それでも2010年の春になんとか草稿を書き上げ、友人に英文を確認してもらい、担当編者に電子ファイルの形で提出した。担当編者は査読の上、問題がなければ、原稿に様々なコメントを加え、執筆者に戻すことになっている。修正指示に基づき、さらに編者と何度か意見交換を重ねた上で、原稿に修正を加え、両者が納得したところ



BNJの編集座長 I. Worthington 近影



で編集座長に提出、これで一通りの作業は完了したことになる。ただし記事は提出順に公開されるわけではないようで、修正稿提出後、実際の公開までずいぶん待たされる場合もある。昨年9月に修正稿を提出した私の記事の一つは、比較的早く今年の3月に最終的な著者校正を経て、4月に公開された。

こうして概ね順調に進行している *BNJ* プロジェクトであるが、大きな問題もある。経済的負担である。ブリル社の公式サイトによれば、*Jacoby Online* の年間購読料が1,180ユーロということであり、これを国内で扱うエヌオンライン社では2010年の時点で200,000円とし

ている（買い切り価格としてブリル社は4,800ユーロを提示しているが、エヌオンライン社は明示していない）。これだけの負担がかかるとなると、どこの機関でも好きなように利用するというわけには行くまい。せっかくレファレンスとしての価値を高め、参考となる英訳まで添えてあるというのに、広く利用に供されないとすれば、残念至極では済まない。おそらく今後、*BNJ* および *Continued* を参照せずに歴史家断片を研究することは難しいであろう。にもかかわらず日本人研究者がこれを殆ど利用できないとなれば…。そう考えると、*BNJ* の成功をただ言祝いではばかりはられないのである。

